

委託事業実施内容報告書
2019年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(A)】

実施内容報告書

団体名：大阪府教育委員会

1. 事業の概要

事業名称	識字・日本語教室の支援力強化事業
事業の目的	【教材の作成】教材を作成し、それらの普及研修を府内で行い、入門・初級学習者の受入数の増加につなげる。 【人材の養成】新たな支援者を養成し、支援者の数を増やして、識字・日本語教室の受入学習者数の増加につなげる。 【日本語教育の実施】「生活者としての外国人」のための日本語教育を実施する。あわせて、「標準的なカリキュラム案」準拠の教材について、教室で意見を聴取しながら開発を進め、教材の質の向上を図る。 以上の目的を向こう3年間で段階的に実施する。1年目は「入門・初級学習者向け教材」の作成、「支援者養成講座」の実施、「日本語教育の実施」を行った。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	府内識字・日本語教室調査結果(約200教室対象)によると平成25年～29年の学習者は、4,358人から5,232人へ20%増加したが、支援者は、2,862人から2,948人と増加が10%を下回る。平成28年度～30年度に受託した文化庁事業による府内全教室訪問調査から、教材については◆入門・初級学習者向けの教材が必要、◆中級学習者向けのよみかきの教材も必要、支援者については◆支援者が不足している、◆支援者の教授法や教材に関する研修の機会が少ないとの課題が明らかになった。
これまで日本語教育が行われていない市区町村の状況	
事業内容の概要	◆「入門・初級学習者向けの教材」の作成(1年目)「標準的なカリキュラム案」準拠の教材を作成し、WEBで公開する。◆「中級学習者向けのよみかきの教材」の作成(2年目)「標準的なカリキュラム案」準拠し、大阪の識字学習の蓄積を活かしたよみかき教材を作成し、WEBで公開する。◆支援者を増やす(1年～3年目)「支援者養成講座」を開催することで新たな支援者を養成する。◆研修機会を増やす(1年目)「支援者養成講座」を実施する。(2、3年目)「標準的なカリキュラム案」準拠の入門・初級学習者向けの教材に係る5回連続の「支援者スキルアップ講座Ⅰ」をエリアごとに実施する。(3年目)「標準的なカリキュラム案」準拠の中級学習者向けのよみかき教材に係る5回連続の「支援者スキルアップ講座Ⅱ」をエリアごとに実施する。◆日本語教育を実施し、教室で教材に関する意見を聴取しながら開発を進めた。 上記の3年計画の事業内容のうち、今年度は1年目の取組を行った。
事業の実施期間	令和元年6月～令和2年3月 (10か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	上杉 孝實	京都大学 名誉教授
2	森 実	大阪教育大学 教授
3	有田 典代	NPO法人関西国際交流団体協議会 理事
4	山野上 隆史	(公財)とよなか国際交流協会 理事・事務局長
5	池嶋 伸晃	大阪府教育庁市町村教育室地域教育振興課 首席社会教育主事
6	松村 平	大阪府教育庁市町村教育室地域教育振興課 主任社会教育主事



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	令和元年9月2日(月) 15:00～17:00	2時間	大阪府新別館北館 会議室兼 防災活動スペース5	上杉 孝實、森 実 有田 典代、山野上 隆史 池嶋 伸晃、松村 平	議題 2019年度文化庁委託事業の実施内容について 検討内容 進捗状況報告及び実施内容に対する指導助言、評価
2	令和2年3月4日(水) 10:00～12:00	2時間	大阪府新別館北館 会議室兼 防災活動スペース5	上杉 孝實、森 実 有田 典代、山野上 隆史 池嶋 伸晃、松村 平	議題 2019年度文化庁委託事業の報告及び令和2年度文化庁委託事業への取組について 検討内容 実施報告及び取組内容に対する指導助言、評価

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	大阪府内市町村識字・日本語教育担当課 大阪府自治体国際化推進連絡会議 大阪府内市町村国際交流協会事務局 日本語教育支援グループ「ことのは」 (公財)とよなか国際交流協会 ※府内における全ての識字・日本語教育の関係者を巻き込むことによって府内全域の連携を図り、成果を府内全域に普及させることをめざした。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	【教材の作成】識字・日本語教室での教育について造詣の深い日本語教師が、教材の作成を担当した。また2年目以降に行う教材の普及研修「支援者スキルアップ講座Ⅰ」、「支援者スキルアップ講座Ⅱ」の内容も検討した。 【人材の養成】地域日本語教育コーディネーターが行政機関、国際交流協会等と連携して日本語学習支援者のニーズに合致した日本語教育研修プログラムを監修した。 【日本語教育の実施】モデル的な日本語教育を実施する国際交流協会の理事・事務局長が本申請事業のコーディネーターを務め、日本語教育を実施した。加えて「標準的なカリキュラム案」準拠の教材に関連して、教室での意見聴取も行った。 ・中核メンバー及び教育庁担当職員が、会議を開催して事業の進捗状況の確認を行い、効果的なアンケートの実施や、学習者のニーズに合わせた教材作成等を検討し、事業の目的達成を期した。 ・大阪府内市町村識字・日本語教育担当者と年2回の連絡会議を開催して、事業の内容を周知することで市町村内の各教室への支援の充実を図った。 ・大阪府内市町村識字・日本語教育担当課と大阪府自治体国際化推進連絡会議、大阪府内市町村国際交流協会事務局を通じて、日本語教育を行う人材の養成研修への参加要請を市町村内の各教室に行った。 以上の体制で3年間継続して、実施する。
----------	--

3. 各取組の報告

日本語教育の実施【活動の名称：(公財)とよなか国際交流協会による日本語教育活動】											
目的・目標	作成する教材に関連して、支援者の意見を聴取する。 日本語学習を通じて学習者が安心して参加できる居場所をつくる。										
内容の詳細	(公財)とよなか国際交流協会は、大阪北部の駅直近にある国際交流協会で、日本語教室を「日本語交流活動事業」として複数開催している。それぞれの教室には、特徴があり、多様な学習者(留学生、子育て中の外国人女性、勤労者など)が集まっている。今後の府内での多様な在留外国人の増加に対して、パイロット的な取組となることを期して、教室の特徴を活かした60時間(2時間×30回)の日本語教育の実施のなかで以下の取組を行った。 1. 標準的なカリキュラム案に準じて開発される教材に関連して意見聴取を実施した。 2. 外国人学習者が主体となる取組み(外国人住民への教室活動の案内等)を実施した。 3. 教室運営委員会を設置し、日本語学習の学習者への日本語教室での支援のあり方を検討した。 4. 教室の取組について広報するとともに、市町村識字・日本語担当者連絡会議でも報告して情報を発信した。										
実施期間	令和元年8月1日～令和元年10月3日				授業時間・コマ数		1回2時間×30回＝60時間				
対象者	日本語学習の学習者、学習支援者				参加者		総数971人 (受講者481人、指導者・支援者等490人)				
カリキュラム案活用	1)「生活上の行為の事例」の多言語版を活用して、学習者のニーズ把握を行った。 2)指導力評価項目一覧を参考に、支援者と日本語教育プログラムの点検・改善を行った。 3)『日本語能力評価』冊子を活用して、「能力記述のリスト」で学習者の日本語能力の確認を行った。 4)『指導力評価』冊子を活用して、「指導力評価項目一覧」から教室活動の振り返りを行った。										
使用した教材・リソース	「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について・活用のためのガイドブック・教材例集・日本語能力評価について・指導力評価について										
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
	191	58	0	135	25	5	13	0	52	0	
	ドイツ(2人)										
日本語教育の実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	令和元年8月1日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	24	日本語で話そう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか18人		
2	令和元年8月5日(月) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	7	日本語で話そう	会話の中で共通点を見つけ、共感しながら日本語を学んだ。		和田由起子	黒島トーマス友基ほか12人		
3	令和元年8月19日(月) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	9	日本語で話そう	敬語について学び、実際に使用した。		和田由起子	黒島トーマス友基ほか13人		
4	令和元年8月26日(月) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	9	日本語で発表しよう	災害時の日本語について学び、発表形式で使用した。		和田由起子	黒島トーマス友基ほか12人		
5	令和元年9月2日(月) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	4	日本語で発表しよう	同音異義語について学び、発表形式で使用した。		和田由起子	黒島トーマス友基ほか13人		
6	令和元年9月9日(月) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	9	日本語で発表しよう	文章を書き、発表した。		和田由起子	黒島トーマス友基ほか13人		
7	令和元年8月22日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	22	日本語で話そう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか16人		
8	令和元年8月29日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	23	日本語で書こう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか15人		
9	令和元年9月5日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	24	日本語で書こう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか16人		
10	令和元年9月12日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	25	日本語で書こう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか15人		
11	令和元年9月19日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	27	日本語で書こう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか22人		
12	令和元年9月26日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	24	日本語で話そう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか15人		
13	令和元年10月3日(木) 13:30～15:30	2	とよなか国際交流センター	21	日本語で話そう	前半は日本語のレベル別でグループに分れ学習した。後半は会話と読みのグループに分れ学習した。		有賀千洋	黒島トーマス友基ほか15人		
14	令和元年8月2日(金) 10:00～12:00	2	とよなか国際交流センター	34	日本語で話そう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。		長谷川洋司	黒島トーマス友基ほか36人		

15	令和元年8月9日(金) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	25	日本語で話そう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	長谷川洋司	黒島トーマス友基ほか32人
16	令和元年8月23日(金) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	19	日本語で書こう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	長谷川洋司	黒島トーマス友基ほか21人
17	令和元年8月30日(金) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	32	日本語で書こう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	長谷川洋司	黒島トーマス友基ほか33人
18	令和元年9月6日(金) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	39	日本語で書こう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	長谷川洋司	黒島トーマス友基ほか36人
19	令和元年8月18日(日) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	3	日本語で話そう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	吉田潤子	黒島トーマス友基ほか8人
20	令和元年8月25日(日) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	14	日本語で話そう	ボランティアと学習者がマンツーマンで読み書き、会話について学んだ。	吉田潤子	黒島トーマス友基ほか9人
21	令和元年9月8日(日) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	17	日本語で書こう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	吉田潤子	黒島トーマス友基ほか7人
22	令和元年9月15日(日) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	18	日本語で書こう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	吉田潤子	黒島トーマス友基ほか8人
23	令和元年9月3日(火) 19:00~21:00	2	とよなか国際交流センター	13	日本語で話そう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	中田峯代	黒島トーマス友基ほか10人
24	令和元年9月10日(火) 19:00~21:00	2	とよなか国際交流センター	14	日本語で話そう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	中田峯代	黒島トーマス友基ほか10人
25	令和元年9月6日(金) 19:00~21:00	2	とよなか国際交流センター	6	日本語で話そう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	石墨方子	黒島トーマス友基ほか8人
26	令和元年9月13日(金) 19:00~21:00	2	とよなか国際交流センター	5	日本語で話そう	ボランティアと学習者が小グループに分れ、読み書き、会話について学んだ。	石墨方子	黒島トーマス友基ほか4人
27	令和元年8月3日(土) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	4	日本語で話そう	グループで会話を通して日本語を学んだ。	丸山竹司	黒島トーマス友基ほか5人
28	令和元年8月10日(土) 10:00~12:00	2	とよなか国際交流センター	3	日本語で話そう	グループで会話を通して日本語を学んだ。	丸山竹司	黒島トーマス友基ほか6人
29	令和元年8月11日(日) 14:00~16:00	2	とよなか国際交流センター	1	日本語で話そう	グループで会話を通して日本語を学んだ。	木下直	黒島トーマス友基ほか1人
30	令和元年8月25日(日) 14:00~16:00	2	とよなか国際交流センター	6	日本語で話そう	グループで会話を通して日本語を学んだ。	木下直	黒島トーマス友基ほか1人

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第2回 令和元年8月5日】

この日は「私もそうです！」をテーマに、学習者がボランティアとの会話の中からお互いの共通点を探しながら日本語を学んだ。最初はぎこちなく会話を進めていた学習者とボランティアも、お互いの意外な共通点(好きな食べ物や旅行の話など)が見つかるたびに会話が弾むようになった。そうすることで自発的な発言が増え、より意欲的に学習を行うことができた。また、学習の終盤では学習者とボランティアがお互いの共通点について一緒に発表し、他の学習者やボランティアとともに情報の共有を行った。

○取組事例②

【第4回 令和元年8月26日】

この日は「うわぁ！たいへんだこんなときどうする？」をテーマに、学習者がボランティアとのマンツーマンでの会話学習、及び発表をおこなった。ボランティア向けにとよなか国際交流協会が行った災害時の活動についての説明をもとに、学習者向けに災害時の活動について学ぶ内容とし、災害時に必要な日本語や情報について授業を行った。ボランティアは地域の避難所や、地震が起きた時の行動などについて、上記説明や実体験をもとに授業を行い、学習者は、自分自身の平成30年6月の大阪北部地震の経験等も踏まえることで、普段にも増して意欲的に学習を行った。



(2) 目標の達成状況・成果

学習の成果について、教室運営委員会での振り返りや学習者への聞き取りを行った。教室運営委員会においては、学習者がどのようなことに興味、関心があるか情報共有しながら、学習者にとって効果的な日本語学習となるように、活動で取り上げるテーマについて検討した。また、学習者向けにアンケートも実施し、63人から回答を得た。

アンケートでは日本語の上達について、上手になった、まあまあ上手になったと感じている回答が60人に達し、日本語上達の効果があったことがわかった。また、講師とボランティアは、日本語の学習だけではなく、交流にも重点をおき活動を行った。取組事例に挙げたように、お互いに親近感がわくようなテーマ設定や、地域の情報を活動に盛り込み、同じ地域に暮らす市民同士としてつながる工夫をおこなった。学習者によって交流や日本語に対するニーズが違い、活動が学習者にとって満足いくものになっているかの懸念があったが、これもアンケートで満足している、まあまあ満足していると感じている人が61人にのぼり、学習者のニーズに合致していることが確認できた。

(3) 今後の改善点について

アンケートでは日本語が不自由で困ったことがありますかという問いに対して、病気になったとき(回答30人)、郵便局・銀行に行ったとき(回答25人)、市役所に行ったとき(回答24人)など、生活に密着した場面で困ったことがある人が多くいることがわかった。また、困ったときだれに相談しますかという問いには家族(回答34人)と答える人が最も多く、日本人の友達(回答17人)、日本人の知り合い(回答15人)と答える人は半分に満たなかった。さらに、その他(いない、自分で解決する)と回答した人も4人いた。

これらのことから、日本語学習の場と、地域の人たちとの交流の場が継続して必要であると考え、今後は現在の実施体制を維持しながら、定期的な聞き取りを行うことで学習者のニーズを把握し、そのニーズにより近い活動となるように、意見を活動に反映していきたい。

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施【活動の名称:支援者養成講座】										
目的・目標	「支援者養成講座」7回連続の講座を開催することで新たな支援者を養成する。									
内容の詳細	・日本語教育の専門家を講師として、初級学習者が陥りやすい不安の解消法や、「やさしい日本語」の考え方、実物を使った日本語指導実践、カリキュラム案等の活用方法など、識字・日本語教室で日本語を学ぶ学習者への学習支援方法の基礎を身に付けた。講座のうち一回は、教室で運営者・支援者から講義をうけ、受講後に識字・日本語教室で支援が始められるように、府内の識字・日本語教室の見学を行った。 【研修内容】 ①府内識字・日本語教室と日本語学習支援ボランティア ②初めて日本語を学ぶ学習者の声を聴いて考えよう ③識字・日本語教室で「はじめまして最初の活動の進め方」 ④「対話を意識した活動の進め方・標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える1」 ⑤「発音と文字の指導、標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える2」 ⑥「初級文型を見てみよう、標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える3」 ⑦日本語学習支援へむけて(教室見学と活動案内)									
実施期間	令和元年7月12日～令和元年10月1日				授業時間・コマ数		1回4時間×6回＝24時間 1回6時間×1回＝6時間 合計30時間			
対象者	日本語の学習支援に興味がある人、 識字・日本語教室の学習支援者				参加者		総数115人 (受講者100人、講師・指導者等15人)			
カリキュラム案活用	1)「生活上の行為の事例」の多言語版を活用して、支援者が学習者のニーズ把握を行う方法を学んだ。2)指導力評価項目一覧を参考に、日本語教育プログラムについて学んだ。3)『日本語能力評価』冊子を活用して、「能力記述のリスト」で支援者が学習者の日本語能力を確認する方法を学んだ。4)『指導力評価』冊子を活用して、「指導力評価項目一覧」から支援者が活動の振り返りをする方法を学んだ。(上記を第4、5、6回目で実施した。)									
使用した教材・リソース	『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について・活用のためのガイドブック・教材例集・日本語能力評価について・指導力評価について									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
										100
養成・研修の実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	令和元年7月12日(金) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	15	府内識字・日本語教室と日本語学習支援ボランティア	外国人をめぐる状況と日本語ボランティア活動の原点、識字・日本語教室の役割等について講義		澤田 幸子	松村 平	
2	令和元年7月19日(金) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	16	初めて日本語を学ぶ学習者の声を聴いて考えよう	コミュニケーションと学習者の気持ちの理解、日本語の難しさ等について講義		安田 乙世	松村 平	
3	令和元年7月26日(金) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	16	識字・日本語教室で「はじめまして最初の活動の進め方」	学習者とのコミュニケーション手段とはじめの一歩の活動、入門期の活動等について講義		澤田 幸子	松村 平	
4	令和元年8月28日(水) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	16	対話を意識した活動の進め方・標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える1	初級学習者と日本語での対話を深めるための工夫と標準的なカリキュラム案の具体化等について講義		辻村 文子	松村 平	
5	令和元年9月18日(水) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	14	発音と文字の指導、標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える2	日本語の音声の特徴と文字の特徴、標準的なカリキュラム案より災害に備え対応する等について講義		伊東 和子	松村 平	
6	令和元年9月25日(水) 13:00～17:00	4	大阪府教育センター	11	初級文型を見てみよう、標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える3	初級文型と会話の第1歩、標準的なカリキュラム案より余暇を楽しむ等について講義		伊東 和子	松村 平	
7	令和元年10月1日(火) 13:00～17:00 19:00～21:00	6	大阪府教育センター 浅香識字・日本語教室	12	日本語学習支援へむけて(教室見学と活動案内)	大阪における識字・日本語教室の取組みの「これまで」と「いま」と「これから」について講義、浅香識字・日本語教室の見学		丸山 敏夫	上田 哲司 松村 平	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第3回 令和元年7月26日】

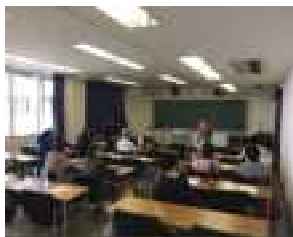
第3回支援者養成講座では、「識字・日本語教室で はじめまして 最初の活動の進め方」をテーマに、一般財団法人海外産業人材育成協会関西研修センターから澤田幸子先生を講師に招いて、学習者とのコミュニケーション手段とはじめの一歩の活動、入門期の活動等について講義が行われた。日本語がまだほとんどわからない学習者とのコミュニケーション手段として、絵や写真、実物を使ってコミュニケーションのきっかけが作れることについて講義が行われた。コミュニケーションをとった後のはじめの一歩の活動で、どのような項目を取り上げるか、また実際の活動のシミュレーションでは、受講者がワークショップ形式で話し合っ考える機会が作られ、入門期の学習者への学習支援活動についての基礎学習が実施された。



○取組事例②

【第6回 令和元年9月25日】

第6回支援者養成講座では、「初級文型を見てみよう、標準的なカリキュラム案を参考に生活上の行為を考える3」をテーマに、大阪YWCA日本語教師会から伊東和子先生を講師に招いて、初級文型と会話の第1歩、標準的なカリキュラム案より「余暇を楽しむ」等について講義が行われた。初級文型と会話の第1歩では、学習者の日本語力のアップのため、単語だけの会話や単語の羅列ではなく、文として話せるよう初級文型について、学習者が言いたいことを推測したり、言葉を入れかえることによる文章の応用、文型の形と意味などについて、具体例や質疑応答を交えながら講義が行われた。標準的なカリキュラム案より「余暇を楽しむ」では、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集も活用しながら、写真を利用した会話のきっかけと、「余暇を楽しむ」に関連した活動の希望を聞き取る質問文づくりなどが行われ、文章として会話が成立するための基礎学習が実施された。



(2) 目標の達成状況・成果

全7回、毎回アンケートを行い、のべ88人から回答を得た。講義について、「大変役に立った。」や「視野がひらけて楽しい」など肯定的な意見が寄せられた。「このプログラムを受ける前よりも、「生活者としての外国人」に対する日本語教育への理解が深まったと思いますか。」との問いに対して、「深まったと思う」と「まあまあ深まったと思う」を合わせると、各回ともに全員が肯定的な回答であり、「深まらなかった」と回答した人はいなかった。また、「このプログラムを受けて、「生活者としての外国人」のための日本語教育に関わってみたいと思いましたか。」との問いに対しても、日本語教育のボランティアをしたことがない方からの回答で、「関わってみたいと思う」と「できれば関わってみたいと思う」を合わせると、こちらも各回ともに全員が肯定的な回答であり、新たな支援者を養成するという目標に合致した結果が得られた。

(3) 今後の改善点について

事業評価のための運営委員会において、30時間の講座の実施について、1回の講座の時間は長くても3時間程度にした方がが良いのではないか、という指摘があった。受講申し込みが26名であったにもかかわらず、各回の参加者が毎回15名程度であった点も踏まえて、今後の改善点として、講座名や講座内容など、学習支援を考えている人が気軽に参加しやすい講座にシフトしてはならない。そのため、次年度は講座の実施日程に余裕を持たせ、講座1回あたりの時間を短縮することを検討している。また、実際に学習支援をされている方が、実施曜日が特定の曜日に偏ると参加することができない、ということを防ぐため、次年度以降、講座実施曜日に偏りがないように留意したい。

日本語教育のための学習教材の作成【教材の名称:きいて まねして はなして –「わたしたちが語る」20のエピソード–】			
目的・目標	大阪府全域で有効に活用できる、カリキュラム案に準拠した入門・初級学習者向け教材を作成し、その使用をもって、今後の入門・初級学習者並びに日本語学習支援者の増加を促し、府内の日本語教育の質の向上を図る。		
内容の詳細	入門・初級学習者向けの適切な教材が不足しているという各地域における識字・日本語教室の学習支援者からのニーズを鑑み、長年、地域の識字・日本語教室の支援者養成などに関わってきた執筆者が、大阪府内で学ぶ学習者が自分を生き生きと語り、社会に繋がっていける日本語運用力を養成することを目的とした教材(「きいて まねして はなして」)を作成することで、今後の日本語学習者の増加に対応するとともに日本語学習支援者のスキルアップを図り、大阪府内の識字・日本語教室の受入れ体制を充実させる一助とする。		
実施期間	令和元年6月5日～令和2年2月28日	作成教材の 想定授業時間	1回 2時間×30回＝60時間分
対象者	入門・初級学習者、学習支援者	教材の頁数	83ページ(テキスト本冊)、21ページ(イラスト集) 他、23ページ(Web上でダウンロード可能なパート2【語り文】と目次のローマ字版)
カリキュラム案活用	入門・初級学習者が社会の中で日本語を使って健康かつ安全に、そして自立した生活を送れることをこのテキストの到達目標とする。つまり、「自分のことを語れるようにすること」により対話による相互理解を進めることで「生きる力としての日本語」を獲得し、社会とつながり、生き生きと幸せに暮らせること、それらの点を主眼に据えテキストを執筆作成した。		
事業終了後の教材活用	大阪府内全域の識字・日本語教室に、本教材を別冊イラスト集と共に配布し活用を促す。併せて、これらの普及研修を行い教材を周知させるとともに使用方法も浸透させる。Webで本教材及び補助教材としての【語り文】のローマ字版も公開し、より多くの学習者や学習支援者が効果的に使えるようにする。		
成果物のリンク先	大阪府教育庁市町村教育室地域振興課HP http://www.pref.osaka.lg.jp/chikikyoiku/		



4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

【教材の作成】教材を作成し、それらの普及研修を府内5エリアごとに行い、入門・初級学習者の受入数の増加につなげる。
【人材の養成】新たな支援者を養成し、支援者の数を増やして、識字・日本語教室の受入学習者数の増加につなげる。
【日本語教育の実施】「生活者としての外国人」のための日本語教育を実施する。あわせて、「標準的なカリキュラム案」準拠の教材について、教室で意見を聴取しながら開発を進め、教材の質の向上を図る。
以上の目的を向こう3年間で段階的に実施する。1年目は「入門・初級学習者向け教材」の作成、「支援者養成講座」の実施、「日本語教育実施」のなかでの意見聴取等を行う。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

・「入門・初級学習者向けの教材の作成」の取組を行うことによって、標準的なカリキュラム案に沿った大阪府独自の入門・初級学習者向けのテキストが完成した。今後、教室への配布やWEBに公開することで、地域の教室での入門・初級学習者支援の一助とする。
・「人材養成のための支援者養成講座」の取組を行うことによって、今まで識字・日本語教室で学習支援を行ったことがない受講者が今後、教室で支援者として活動を始めるためのきっかけとなった。また、現在教室で学習支援を行っている受講者が、教室での学習支援のスキルを上げることができた。
・「日本語教育の実施」の取組を、さまざまな教室があるとよなか国際交流協会で実施することにより、学習者がどのような日本語の学習法や教材を必要としているかについての情報を得ることができ、教材の作成にフィードバックすることができた。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

支援者養成講座において、いわゆる「標準的なカリキュラム案5点セット」の紹介や概要の説明だけでなく、「標準的なカリキュラム案について」の「健康を保つ」、「安全を守る」、「余暇を楽しむ」等の中分類から、受講者に具体的に項目に当てはまるものと考えてもらい、どのような日本語学習支援が必要かについてワークショップ形式で検討を行った。また、「標準的なカリキュラム案 教材例集」の「多言語版問診票」等を用いて、具体的な日本語指導方法の講義を行った。支援者養成講座受講者の、「文化庁5点セット」に対する認知度は高くなかったが、実際に取扱うことによって、内容の具体性を認識してもらうことができ、普及に寄与することができた。教材・教案の作成では、全30課の教材の構成を「標準的なカリキュラム案」に則って行った。日本語教育の実施において、「地域における日本語教育の推進に向けて」の「日本語教育に関する調査の共通利用項目について」から質問項目を抜粋して学習者からの意見聴取を行った。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

支援者養成講座については、地域の識字・日本語教室を運営されているコーディネーター等に、全7回の体系立てた内容を説明した上でそれぞれの講座に相応しい講師の選定などのアドバイスや講師依頼の声掛けなどを行っていただいたことで、効果的な研修を実施することができた。教材の作成については、作成メンバー以外にコーディネーター等に参加していただき意見を述べていただくことで、教室でのニーズに基づいた教材の作成を行うことができた。日本語教育の実施については、実施アンケートの項目を学習支援者などから意見を伺いながら作成し、学習者のニーズ把握などができたことで、識字・日本語教室にとっても有意義なアンケートとなった。今後は、新たな支援者や教材が、教室の学習者の受入数増加に寄与するよう、教室と支援者のマッチングや、教材の普及研修を行うことが必要である。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

支援者養成講座の周知・広報については、府のホームページで情報を発信するだけでなく、多くの参加者が見込まれる地域の市町村識字・日本語担当者や識字・日本語教室に、直接チラシを持参・送付するなどして、周知・広報に努めた。その結果、市町村を通じて参加申込が行われたり、地域の識字・日本語教室が取りまとめる形で参加申込があったが、申込者数は想定よりも少なかった。次年度は周知・広報の期間をしっかりと取ることによって、さらに参加者の増加をめざす。事業成果の地域への発信については、教材・教案の作成物を市町村や地域の識字・日本語教室に送付するだけでなく、今後、府のホームページで閲覧・ダウンロードできるようにし、学習支援者が手軽に使用することができる環境を整える予定である。

(6) 改善点、今後の課題について

3つの取組を実施するうえで、契約を締結した日から、実際に事業を開始するまでの期間が短いため、再委託先はかなり慌ただしい事業準備をさせてしまうことになってしまった。契約締結日より先に余裕をもった事業準備ができるよう、事業計画の段階から日程調整等を考慮し、円滑な事業実施とPDCAを心がけ、次年度に活かしていく。
在留外国人が増加し、日本語教育がますます着目されるなか、専門的な指導助言を行うことができるコーディネーターや講師、原稿執筆等が多忙なため、日程調整に苦慮することがしばしばあった。そのため、今後の課題として、事業実施日程等、余裕のある事業実施計画の策定が必要である。

(7) その他参考資料

- ・支援者養成講座チラシ
- ・入門・初級学習者向け教材